
岡山国体記念

岡山市御津観光ガイドブック

御津
の
あけぼの

MITSU

●御津観光ガイドブック目次



- | | |
|------------------------|------|
| 1. 「御津町」の生い立ち | 3 頁 |
| 2. 旧西武藤邸 (御津町郷土歴史資料館) | 5 頁 |
| 3. 金川城 (玉松城) 跡 | 7 頁 |
| 4. 徳倉城 (土倉城) 跡 | 9 頁 |
| 5. 虎倉城跡 | 11 頁 |
| 6. 日蓮宗不受不施派祖山「妙覚寺」 | 13 頁 |
| 7. 難波抱節の偉業 | 15 頁 |
| 8. 神戸事件の真相 | 17 頁 |
| 9. 金川の家並み | 19 頁 |
| 10. 宇甘刀 | 23 頁 |
| 11. 八百屋お七物語 | 25 頁 |
| 12. 片山兵曹長 | 27 頁 |
| 13. 吉行あぐりさんゆかりの地 | 29 頁 |
| 14. 河原邸 | 31 頁 |
| 15. 坪田譲治 (心の原風景としての天満) | 33 頁 |





御津観光マップ

1.

「御津町」の生い立ち

御津町は昭和28年4月に当時の御津郡牧山村、宇垣村、宇甘東村、宇甘西村、金川町、赤磐郡葛城村、五城村の一町六村の合併で発足しました。

その後、同年7月牧山地区大字中野が野谷村(現岡山市)に、29年4月には牧山地区大字下牧と中牧の一部が岡山市へ分離合併し、さらに31年9月に赤磐郡布都美村大字中畑・石上の一部を御津町へ編入合併して、「御津町」域となりました。しかし、平成17年3月22日、平成の大合併により、岡山市に編入合併し、その幕をとじました。

歴史的には、古代の部の名あるいは荘園としての名が残る地名も見受けられ、中心地金川は備前の国の守護職であった松田氏の城下町でした。江戸時代には、備前藩家老の日置氏の陣屋町として栄え、街道宿や高瀬舟の発着する川港として賑わい、東西南北を結ぶ交通の要衝でもあったようです。

明治以降、金川はその町並みの面影を残すのみとなり、昭和の大合併(昭和28年)以降「人にやさしいまち、若者が住みたくくなるような地域、健康で豊かな田園都市」を目指して、21世紀のまちへと大きく飛躍しようとしています。

出典郷土史参考書

- 郡誌 — 御津郡誌 大正12年刊
- 町史 — 御津町史 昭和60年刊
- 金川町史 — 昭和32年刊
- 備前の名医難波抱節 — 平成12年刊
- 金川ものがたり — 平成14年刊
- 御津の山城 — 平成14年刊

2.

旧西武藤邸 H15年4月1日開館 (現在:御津町郷土歴史資料館)



御津町の中心地金川の西町にあった、武藤邸は江戸時代後期に建てられた建物で天保時代から明治の終わりまで酒造業を営んでいました。家は名主を務め、第七代当主となった武藤壽太郎は地域の発展に多大の功績を残されています。

大屋根の母屋、数奇屋建築の離れ、蔵、庭園にある榎は伝統的歴史を残す旧家の風情を漂わせていました。周囲に点在する東の武藤邸(かながわSAKAKURA)、一級河川「宇甘川」、日蓮宗不受不施派の祖山「妙覚寺」、中世の山城跡を残す「臥竜山」と調和した景観は、金川の歴史的町並みの景観をつくっています。

西武藤邸の大屋根は本瓦葺き、妻は箕甲になっていて、城の一角を見るようでした。上部は、塗屋造りで重量感があります。下部は、彫り物のある頑丈な持ち送り、土間と張り出しの太い格子と現在ではあまり見かけることの出来ない収まりを各所に残していました。今はその様子は写真で見るだけで、現在は、「御津町郷土歴史資料館」として、御津地域の文化・歴史の研究活動拠点となっています。



武藤壽太郎

- 郡誌-P.361
- 金川町史-P.248

安政4年5月(1857)金川に生まれる。酒造を業として、家は戸長も務める。明治18年各村連合会議員に挙げられる。明治22年町村実施により村長となり、明治26年(1893)には県議員にもなる。その後武藤銀行を金川に設置。また金川水力電気会社を興す。明治36年岡山養忠学校を金川に移して私立金川中学校を設立。大正10年(1921)没。

3.

金川城(玉松城)跡

所在地

岡山市御津金川および御津草生

登城口

平成17年現在、御津支所前
(標識案内図あり)

妙覚寺横手の小道(標識案内図あり)、
本丸跡まで20分

城主

松田元成他備前松田氏代々及び宇喜多春家

築城主

松田元成以降、松田氏の本城として整備されたと伝えられる。

形式

複合連郭式山城(標高225m) ●郡誌-P.263 ●金川町史-P.24~

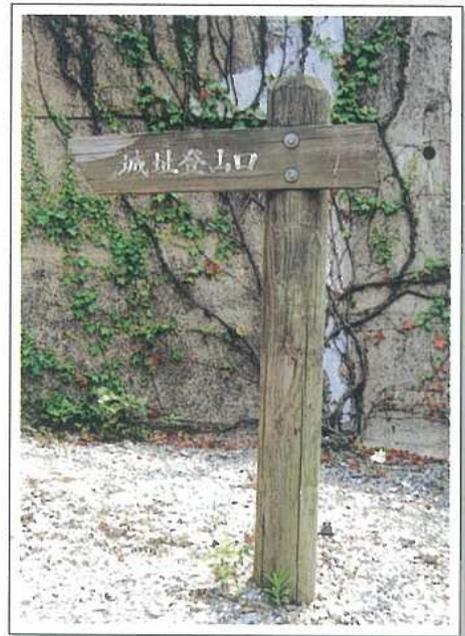
遺構

本丸跡、二の丸跡、北の丸跡、道林寺丸跡、井戸(「天主の井戸」「杉の木井戸」「白水の井戸」)出丸跡、石垣、堅堀、掘切

沿革

金川は、宇甘川が旭川に合流する地に位置し、この二つの川を利用する水運の基地であり、備中高梁へ向かう松山往来の基点でもあり、備前国西部の内陸の要衝であったと言えよう。

こんな地の利を背景に、備前西部の実質的な守護代として勢力を持っていた松田元成(1480)が富山から金川に移り、城を整備して守護の赤松氏から自立し戦国大名の道を歩いたのでした。



元成の子元勝、そして元盛、元輝と続くが、備前東部の天神山城主の浦上宗景と勢力を争い、最後は宗景の被官宇喜多直家に包囲せられ、永禄11年(1568)7月7日落城する。

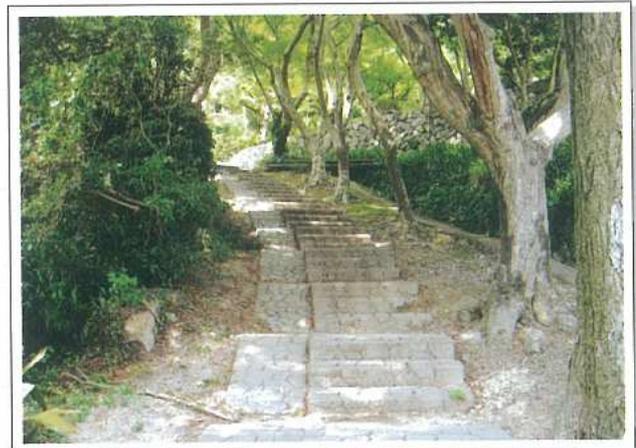
その後、宇喜多直家の弟宇喜多春家が城主となるが、関が原の合戦後宇喜多氏が滅亡し小早川、池田氏と移り池田氏の家老、日置氏が入るも、一国一城令により廃城となる。その面影は、慶長備前国絵図に偲ぶことができる。

訪城紀行

備前国最大規模の中世山城とも云われるこの城の目玉の一つは、三つの井戸にある。

- ①「天主の井戸」は、本丸跡の北側の土塁を上って見下ろすと直径5m位で立派。
- ②「杉の木井戸」は、本丸から二の丸へ行く途中にある。石積されていて、井戸の上部も石積。
- ③「白水の井戸」は、本丸から北の丸の途中にあるが、尾根上からは見えず、幾段かの郭跡を降りて行くと小さな郭跡の中にポツンと、しかし、完保状態の石積み井戸が口をあけている。
- ④その他遺構は、中世山城の面影を見ることが出来る。

- 町史-P.128～
 - ◇松田氏
 - ◇鹿田荘と松田氏
 - ◇松田氏と金川時代
 - ◇玉松城の由来
 - ◇松田元隆の戦死
 - ◇松田氏の定紋
 - P.160 金川(玉松)城址
 - P.780 玉松城址
 - P.1271～
 - ◇備前軍記
 - ◇中国兵乱記
 - ◇備前文明乱記
- 金川ものがたり-P.24～ ◇松田氏の登場
- 御津の山城- ◇2金川(玉松)城



4.

徳倉城(土倉城)跡 県指定史跡

所在地

岡山市御津河内。大手道口→空港線沿いに「徳倉城」の登城図と説明板がある。(頂上まで25分)

築城主 城主

松田元資、宇垣市郎兵衛、遠藤河内守が城主となる。

形式 遺構

連郭式山城(標高232m)郭、石垣、石塁、土塁、空壕、掘切、井戸

沿革

備前の守護代金川城主の松田元隆(元澄)の四男、元資が文明8年(1476)にはすでに居城していたといわれる。

その後、松田氏の重臣、宇垣氏が代々居城とする。永禄11年(1568)戦国大名になりつつあった、松田氏を滅ぼした宇喜多直家の寵臣、遠藤河内守が城主となるが、宇喜多氏が備前をほぼ平定した後に、遠藤河内守は岡山城に移り、城番のみを置くが、関が原の合戦後、小早川秀秋の時廃城となる。

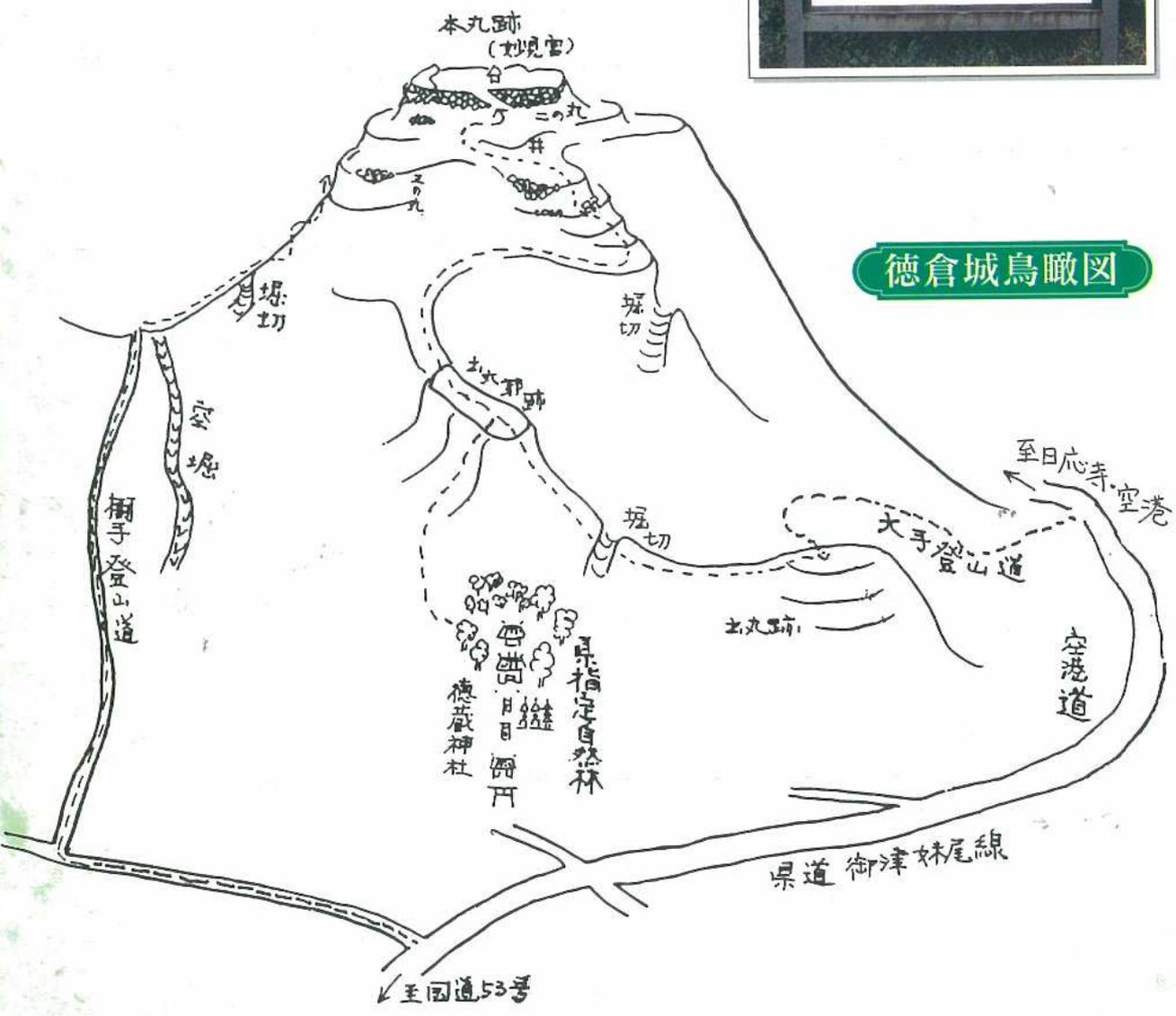
訪城紀行

- 石垣としては、備中松山城と比べて見劣りするが、城山南の山塊との間に作られた数百mに及ぶ空壕は見事なものである。
- 本丸は、野面積みの石垣がよく保存され、石垣として最も古い工法として県指定文化財に指定されている。

- 郡誌 - P.262 徳倉城
- 町史 - P.158 徳倉城址
P.778 土倉城
- 御津の山城 - 9 徳倉城跡



徳倉山



徳倉城鳥瞰図

5.

虎倉城跡 (連郭式山城)

所在地

岡山市御津虎倉

登城口

御津虎倉の市場集落のバス停近くの小さなお宮の境内に、説明板がある。脇の小道を進むと右手に「虎倉城」の矢印がある。

約1時間を出丸、1時間20分で本丸跡にたどり着く。

城主

伊賀久隆

築城主

大永年間(1521~1578)服部伊勢守の築城と言われるが確かでない。

伊賀勝隆

形式

山城(標高327m)

遺構

曲輪、石積み、掘切

沿革

備前金川城主、松田氏に代々属していた伊賀久隆の居城として知られる。勝隆、久隆、与二郎(家久)と続く。久隆のとき松田氏の勢力衰退に伴い、備前の宇喜多直家に接近し血縁関係(女婿)を結ぶ。永禄11年(1568)直家と共に金川城を攻略し松田氏を滅ぼす。

天正2年(1574)毛利氏の備前侵攻で虎倉合戦があったが毛利勢は敗退した。久隆は宇喜多直家にとって有力な武将であった。



木を切られない天守跡

しかし備前統一を目指す直家は久隆が毛利氏と内通していると疑いをかけ邪魔になり毒を盛ったのである。久隆の子与二郎は毛利氏を頼って備中国に退散。

与二郎の退散後、宇喜多氏の重臣、長船越中守が城主となり妹婿の石原新太郎を城代としていた。天正16年長船越中守は年始の祝いの席で乱心した石原新太郎に鉄砲で撃たれ急死。城は焼失以降廃城となった。

「虎倉物語」によれば、久隆の子は与三郎であるが与三郎退散後、秀吉方から黒田官兵衛(小寺)、蜂須賀彦右衛門が一時在城した後、天正10年高松城水攻めに活躍したようである。

訪城紀行

- 備中と備前の国境に近い位置に在る虎倉城。急な旧道の途中に、屋敷跡らしい数段の石段が見られる。さらに登ると相当深い掘り切り切りがある。本丸西北の出丸には、伊賀氏と長船氏の供養塔が建っている。これより10分も登ると本丸跡(頂上)に着く。平部分は意外と広い。
- 「日本城郭体系」(新人物往来社)縄張り図に示されている二の丸あたりは、踏み込むことがままならない。
- 木々が乱立する中に、二の丸、三の丸の曲輪跡があり、三の丸西北端には、空堀もある。
- 本丸西斜面には、低いながら石垣も見える。

● 岡山の山城を歩く(株式会社 吉備人出版)

● 郡誌 - P.270

● 町史 - P.163 虎倉城址

P.781 虎倉城址

P.1287 久隆・与二郎(備前軍記)

P.1298 虎倉物語(与三郎)

● 御津の山城 - 7 虎倉城跡

難波抱節 (備前の名医) の偉業

江戸後期寛政3年(1791)岡山に生まれ、15歳の時金川の難波立達(経寛)の養子となり、21歳から4年間京都他で医学を学び金川で開業。各地から多くの門下生を集めた名医でありながら「医は仁術」を信条に、名も無い人々の医療に尽くした人です。



多くの業績の中で特筆されるのは、備前で初めての麻酔薬「麻沸散」を用いた乳癌の摘出手術や足守藩出身の蘭学者の緒方洪庵に種痘を学び、普及させ、さらに江戸時代を通じて最高の産科書と評価された「胎産新書」全10巻を完成させ、その学識・医術の高さは全国に誇れるものです。

文政10年(1827)、2女を痲瘡で亡くした(法名:妙玉童女)。コレラ大流行の折には多くの患者を救いましたが、抱節自身も安政6年(1859)コレラで死去(享年69歳)しました。御津金川の見谷の麓に、お墓があります。(法名:清風軒勁節虚心居士)

彼の開いた医塾「思誠堂」には、1,500人の門下生が雲集したといわれています。抱節の没後140年(平成11年9月)にあたり、「備前の

名医・難波抱節」を記念出版しました。

現在の妙覚寺の裏門が「医院・思誠堂塾」の表門でした。2003年の妙覚寺の火災にも類焼は免れています。

- 金川町史-P.120
- 町史-P.358 ◇難波抱節と思誠堂塾
- 備前の名医難波抱節 中山沃著
- 金川ものがたり-P.87、98



8.

神戸事件 (滝善三郎) の真相

慶応3年12月7日兵庫開港の後、警備の幕府軍が薩長連合軍に大敗して逃走。明けて慶応4年(1865)、備前藩に西宮警備の命令があり、家老の日置常刀が統指揮官として2,000人の軍勢を出兵した。



1月11日午後2時、隊が神戸村の生田川あたりにさしかかった時、通訳をつれた外人2人が隊列の前を横切ろうとしたため、制止したところ、ステッキを振り大声でわめきながら横切ったことから槍で突き、さらに、相手が発砲して、事態が大きくなり、遂に滝善三郎は発砲を命じ、戦争状態にいたった。

イギリス公使パークスは、直ちに英、米、仏などの陸戦隊600人を上陸させ、大砲10門を持って神戸を一時占領した。事件後、滝善三郎は、発砲を命じた責任者として切腹(享年32歳)したものである。

滝善三郎は、萩野流火術をもって日置家に仕え、禄高100石、金川の生まれで東町納所家のあたりに屋敷跡があった。七曲神社馬場に義烈碑が建っている。墓地は、岡山市東山斎場の東方約100mにある。



神戸事件は、明治政府が外国と直接交渉するという明治外交の幕開けとなった事件である。

- 金川町史-P.145 ◇大政奉還と神戸事変
- 町史-P.381~ ◇神戸事件と義烈碑・碑文
 - ◇事件後の備前藩士
 - ◇瀧善三郎自裁之記
- P.1144~ ◇七曲神社への願文
 - ◇神戸事件始末書(高須七兵衛聞書)
- P.1152 ◇神戸事件当時の見取図

9.

金川の家並み

「御津町」の中心金川は、古くより津山往来と備中高梁へ向かう往来の中枢でもあり、備前国西部の内陸の要衝であったと言えよう。

戦国時代は、松田氏が玉松城を築き城下町として、また、妙国寺の門前町として栄えた。江戸時代には日置氏の陣屋町、津山往来の宿場町でもあった。

また金川は、旭川と宇甘川が合流する地に位置し、この2つの川を利用する水運の基地であり、波止、舟着き、常夜燈が整備され最盛時400隻もの高瀬舟が行きかう川港町でもあった。以下、金川に残されている歴史を紹介する。



●郡誌 - P.242 ◇藩代道路
●金川町史 - P.155 一里塚

1. 南から宇甘川まで

岡山市方面から金川への入口は、御津郵便局の前あたり、西から延びた尾根の突先「藪ヶ鼻」に、江戸時代に岡山から津山に行く官道「津山往来」の一里塚が置かれていた。明治25年の洪水で流出したがそれまでは、盛り土に樹木、かたわらには茶屋もある絵図も残っている。ここから宇甘川までが南新町の町並みで、県道の両側に続く家並みには、JAの事務所店舗、JR金川駅、信用金庫、銀行、スーパー、幼稚園・保育園などがあり、東側の家並みの裏には、津山往来の跡が所々に残り、宇甘川に続いている。この地域は、古くは佐波村とも呼ばれ、戦国時代の永禄11年(1568)松田氏が宇喜多直家に攻められた時、野々口の大村勢と宇喜多勢が戦った佐波の古戦場でもある。

●金川町史 - P.229
●金川ものがたり - P.47
●町史 - P.364

宇甘川沿いの鉄橋の西側は見谷(けんだに)で、江戸時代末の安政6年(1859)大流行のコレラの治療に奔走して感染、殉職した備前の名医難波抱節の墓地。さらに、明治31年(1898)に開通した現JR津山線の工事殉職者の墓碑もこの地にある。

2. 宇甘川のほとり ●金川ものがたり-P.72

宇甘川は、吉備高原のほぼ真ん中あたり、枳形山を源とする流呈約40kmの、金川で旭川と合流する河川で、宇甘という名の起源は、古代「鵜飼部」にあると伝えられている。

戦国時代、臥龍山に城を築いた松田氏は、この山と川の間を平地を城下町として、宇甘川と旭川を自然の濠とした。宇甘川に掛けた橋は、板橋であったが、明治時代に土橋、昭和11年に鉄筋コンクリート製の「観波橋」になった。橋のあたりは、往時高瀬舟の船運が盛んな頃は船着場として賑わい当時の石垣・波止を今も見ることが出来る。

●金川町史-P.156 ◇高瀬舟

3. 横町あたり

江戸時代の津山往来もここで板橋を渡り、金川の町へ入る。古絵図には、横町と書かれたものもあり、御札場、番所、柵門があつて出入りを検問していた。柵門を入ると道幅5間、両側には、民家・商家などが並んでいた。東側の家裏は、堀と土塁が築かれ、町口惣門があり東は侍屋敷町、西が町人町であった。惣門の前津山往来が西へ曲がるあたりは商家、宿屋が軒を並べ松山往来・加茂往来の基点となったところであり、南北の往来だけでなく、遠く三石、和気、熊山、赤坂から伊田峠を越え金川、松山往来を通過して高梁、新見へと東西の道の宿場でもあった。

大正11年(1922)金川自動車株式会社、昭和4年(1928)の御津自動車株式会社がバス営業を始めたのもこの辺りである。

●町史-P.573

4. 侍屋敷町あたり

かつては、町口惣門から道は東へおよそ100間、突き当たりは南へ、開く柵門と番所、外の大川岸には高瀬舟の船着場、問屋・食べ物屋・宿屋で賑わう船頭町があった、今の金川高校の体育館のあたりだろうか。宇甘川岸近くには、竹やぶを背負って鉄砲組の長屋があった。今は、高校のグラウンドになっている。●日置氏-町史・金川町史

東町の道の両側は、侍屋敷、お蔵ん丁は蔵の町と侍屋敷と伝えられ、突き当たりは今の御津支所である。ここは、松田氏時代、妙圀寺跡で領主日置氏の御茶屋になった。絵図で見ると小規模の城の構えの陣屋であった。明治時代は臥龍小学校となり、昭和37年御津町合併10周年記念事業として、現庁舎が造られた。

5. 表町あたり ●町史-P.190 ●金川ものがたり-P.70~72

昭和30年代まで営業していた株式会社武藤酒造跡地は、「かながわSAKAGURA」としてギャラリー、ホール、食事処になっています。この施設の角のアクラの木の下には、「金川道路元標」が立ち、近くには、津山往来「作州道」の道標、加茂往来起点の道標もある。●町史-P.556

「かながわSAKAGURA」の斜め真向かい城山の麓には、妙国院がある。松田元成創建の妙国寺の名を継いだものであるが、玉松落城後、見谷に移り廃寺となったものの妙国庵として復興し、昭和6年に現地に移転し、日応寺分院の妙国院となった。●金川町史-P.230

本堂横には、松田氏代々の供養塔がある。正面に「華光院殿妙国日唱大居士」と元成の法名を刻み、まわりに城主代々の法名を刻んでいる。●郡誌-P.151 ●金川ものがたり-P.77

境内には、地域内に数少ない文学碑の一つ芭蕉の句碑がある。花崗岩を満月にかたどった石に「雲折りおり人を休める月見かな」と詠まれ、この句碑は、蒼龍庵青岐(駒井喜代太)が文化3年(1806)建立したと伝えられる。●町史-P.813

6. 七曲神社の馬場

七曲神社には、妙覚寺の横、県道に面して鳥居があり、灯籠・狛犬が立っている。そこから神社の本殿を見上げることができる。祭神は、松田氏の祖神天津兎屋根命のほか、春日大神、天照大神、八幡大神であり、七曲大明神と総称されているようである。松田氏の故郷と言われる神奈川宿の七曲山に鎮座していた、七曲大明神を松田氏が勧請したと伝えられる。(七曲神社縁起) ●金川町史-P.229 ●郡誌-P.121

この馬場には次のものがある。

- ◆難波抱節の顕彰碑 ●町史-P.362
- ◆瀧善三郎の義烈碑 ●町史-P.386、813
「きのう見し夢は今更ひきかえて 神戸の浦に名おやあけなん」
- ◆小神富春碑(七曲神社神職・国学者・歌人) ●金川町史-P.112、P.815
「琴柱をも埋むはかりに梅散りぬ いずれの緒より調べそめてむ」
●町史-P.350 小神富春と国学
- ◆招魂碑 ●町史-P.629 ◆忠魂碑 ●町史-P.629 ◆黒田寿男胸像
- ◆七曲神社文化財:三十六武仙図説明板(町指定文化財) ●町史-P.796

7. 西町あたり

JR津山線の県道鉄橋から西が、西町にあたる。鉄橋をくぐり右へ入ると、城山登山路である。妙覚寺に裏門、旧難波抱節邸の長屋門を右に、そのまま進むと地名木戸の石垣、治部ヶ谷を経て道林寺丸跡、玉松城本丸跡へと続く。

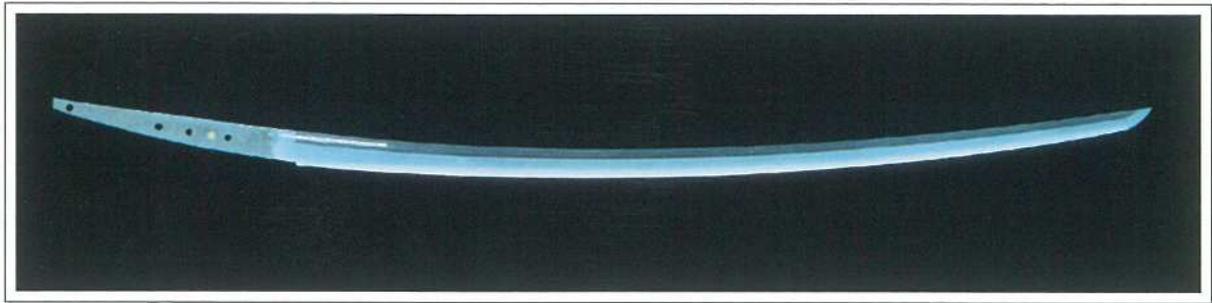
長屋門の前に長三角形の平地があるが、江戸時代の小神富春の屋敷、杉陰之舎跡で、続いて西侍屋敷があり、幕末の西町砲台絵図も残っている。●金川ものがたり-P.111

西町は、往来の両側に武藤家をはじめ商家・民家が並ぶ。下田村との道境は、城山の崖が宇甘川に迫った所で、玉松城落城の時お姫様が身を投げたとか、「あずきあらい」という狐がいたという話もある。また、鶉飼が盛んで、日蓮宗お題目を一石一字書いて、川に沈めて供養をしたという法号石伝説も残されている。●金川町史-P.234 法号石 ●町史-P.946

10.

宇甘刀(雲生、雲次、雲重)

県指定 銘 雲生太刀(市所蔵)



一族は、鶴飼鍛冶とも雲派、雲類とも呼ばれ、津山線金川駅と建部駅の間御津下田字箕地(みのぢ)の宇甘川の支流北谷川を登った西側の山斜面の三段になった辺りが屋敷跡と伝えられるが、現在は、松山になっている。

鎌倉時代末から南北朝にかけて作られた備前刀の作風とはやや異なる、京風の刀剣である。雲生、雲次、雲重が二代、三代にわたり、見事な作刀を残している。祖の雲上の作刀は一振りも見当たらないが、雲生、雲次は優劣が無く、雲重は少し劣るようだ。「御津町」では、昭和59年に雲生作の太刀一振りを所有することができ、現在県立博物館に保管している。

〈このほか、御津北野の片山儀一氏が、銘雲次(長さ1.2m)の宇甘刀を所蔵〉

国指定の重要文化財になっている宇甘刀は十三振りを数え、在銘・無名を合わせれば雲生の刀がかなり多く現存している。

●金川町史-P.36

●町史-P.112 宇甘刀の歴史・系譜
県内の三口・雲生屋敷跡

八百屋お七物語

御津吉尾には、八百屋お七にまつわる祠がある。

江戸駒込の八百屋太郎兵衛夫婦には子が無く、日夜七面尊にお祈りし、女兒が生まれた。七面尊のお陰と信じ「お七」と名づけた。

その後、火災があり太郎兵衛の家も焼け、一家は太郎兵衛の弟が住職をしている小石川の円乗寺に身を寄せた。お七は、円乗寺に出入りしていた同年代の旗本の次男山田佐兵衛と恋仲になった。

新居が完成し家に帰ったお七は、片身を裂かれる思いから病気になった。その話を伝え聞いた吉三郎という男が、佐兵衛の艶書の使いをしては礼金を貰っていた。

吉三郎は、「佐兵衛に逢いたければ家を焼き、また円乗寺に身を寄せれば佐兵衛に逢える」と放火を教えた。お七は、逢いたい一心で、吉三郎の言葉に乗って放火し、火は、一帯に広がり大火となった。お七は、市中を引回され、火あぶりの刑に処せられた。

吉三郎は、お七の処刑後、前非を悔い、名を志誠と改め、お七の分骨を持って諸国を行脚、いつの頃か野々口に留まり、後に小山村で

没した。

村人たちは、お七の遺骨とともに手厚く葬ったと伝えられている。また、野々口の大村家には、吉三郎志誠院日真と書いた曼荼羅がある。

●町史-P.942 ●郡誌-P.305



妙法花月院妙艶信女

日月院吉三信士



片山兵曹長 (片山義雄) ●町史P.666

真珠湾九軍神の一人です。

大正7年9月14日、御津町矢知(旧赤磐郡五城村大字矢知)に生まれました。昭和11年1月呉海兵団入団。16年5月に海軍二等兵曹に任命され、16年12月8日の真珠湾攻撃の時、特別攻撃隊の一員となり、湾内に突入。壮烈な戦死(24才)を遂げました。

昭和17年3月6日、特殊潜航艇乗組員9名を2階級特進させ、片山二等兵曹は兵曹長になりました。

当時感激した人々は、村内外から連日列を成して矢知をめざし、新聞にも連載され、愛唱歌もできました。



片山兵曹長

♪おお赤磐の五城村、
まぶたに浮かぶ山や川…
いざ征けハワイ真珠湾



墓地

また、死地に赴く兵曹長が故郷の父母に捧げた遺書が残されています。遺書は、広島県の江田島海上自衛隊実科学校の資料館に保存されています。

「ご両親様24年のご慈愛を今思い浮かべつつペンをとりました。深まりいく晩秋の空は晴れ明後日の船出を空も祝しているようです……」

13.

吉行あぐりさんゆかりの地

吉行あぐりは、NHKの朝の連続テレビ小説「あぐり」(平成9年<1997>放映)のモデルになった人で、女優吉行和子、作家の吉行淳之介、吉行理恵(二人とも芥川賞作家)の母です。このテレビ小説



は、ご本人吉行あぐりが書いた原作「梅桃(ゆすらうめ)の実る時」をドラマ化したものです。

吉行あぐりは、明治40年7月岡山市で生まれ、15歳で御津町草生の吉行家に嫁ぎました。大正14年2月、関東大

震災で行方不明になった夫エイスケを探しに一人で東京に行き、やっと見つけるが、文士の夢を捨てきれないエイスケと共に東京に住むようになり、生活のため山野美容院の弟子となります。昭和15年、夫が心不全で亡くなり、波乱万丈の人生をおくります。今も東京で美容院を経営しています。

吉行家の墓は、御津草生にあり、長男淳之介もここに眠ります。当時、吉行家は、建設業「吉行組」を営んでいて、御津金川に現存する観波橋(昭和11年竣工)なども「吉行組」の建設によるものです。

●吉行あぐり著「梅桃のみのる時」昭和60年

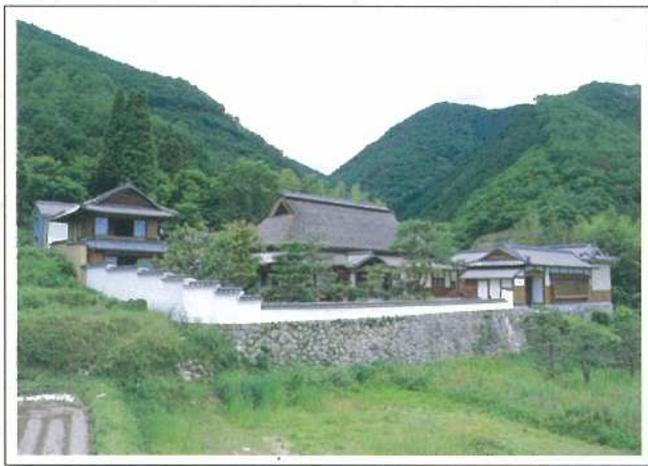


14.

河原邸

緑豊かな妙見山麓のここ御津紙工地区に、旧家河原邸(元大庄屋屋敷)が白壁の塀に囲まれて、堂々とした姿で立っています。母屋は、天保10年(1839)建設され、松を主材とした大型の入母屋造り大黒柱にはケヤキを用い、納戸、台所、土間などには栗材を用いるなど暮らしと風土にマッチした造りとなっていて、現代まで改装を加える必要のないほどの耐久性があります。

土間には、母屋の模型や石臼、かまどなど、当時の日常品を展示しており、昔の生活体験コーナーとして、暮らしと故郷のぬくもりを体感することができます。また、三間つづきの表座敷や、江戸時



代の絵師法橋義信によって描かれた奥座敷の襖絵などもあり、威風堂々たる建造物や、奥納戸の天井裏に造られている隠し部屋等は、時代背景を偲ばせる歴史遺産となっています。

(付設資料室の系図等参照)

15.

坪田譲治 心の原風景としての天満(御津紙工)

御津紙工の天満に在る日蓮宗不受不施派の鷲峰山常在寺の少し下に、あの童話作家坪田譲治の姉の嫁ぎ先の伊丹邸跡があります。譲治は、旧制金川中学生時代にこの家を度々訪れて、有名な「善太と三平」の物語の構想をねっていきます。

この天満に「風の中の子供」たちがフナやハヤを追った天満川や、善太が虹の中を登って行った池があります。この池では、大きな亀の背に、カッパが乗って遊んでいました。川で三平が、タライ舟ではしゃいでいるうちに早瀬に流され、馬に乗って川べりを走って探してくれた鵜飼いのおじさんは、実は姉のご主人がモデルで、小説にあるように八の字の立派なヒゲをたくわえて馬に乗って往診していたお医者さんでした。(「風の中の子供」昭和11年46歳、朝日新聞夕刊連載)

今は、春になると節分草が花開き、カタクリの花が山の斜面に咲き誇る大変美しい村で、譲治のお気に入りの舞台風景だったのです。



坪田譲治(1890年-1982年)

童話作家、早稲田大学英文科卒、家業の島田製織所を手伝う傍ら亀尾映四郎らと同人誌(地上の子)を創刊、「正太の馬」「正太の故郷」などを発表して小説修業に励む。

35年雑誌「魔法」「狐狩り」が出版され坪田文学に日が当たる様になった。中でも正太、善太、三平の兄弟が登場する作品は児童文学として、今でも大人にも子供にも親しまれている。

長谷川等伯年表

妙覚寺所蔵 国指定「墨画淡彩花鳥図屏風」作者

- 1539(天文 8) 能登七尾出生 奥村から長谷川へ
絵仏師信春として活躍
- 1571(元龜 2) この頃 武田信玄を描いたか
- 1579(天正 7) 家業の染色をやめて京へ上る
本法寺で画業に精進
始め狩野派のち雲谷派のち等春に雪舟(等揚)様式を
学ぶ
- この頃 花鳥図屏風を描いたか
- 1592(文禄 元) 智積院(祥雲禅寺)現国宝の楓図を描いたか
妙心寺龍仙庵の枯木猿猴図描く
- 1599(慶長 4) 本法寺の涅槃図を描く
- 1605(慶長10) 法眼に叙せらる(守安 収)
- 1607(慶長12) 禅林寺の波涛図を描く
- 1608(慶長13) 雪舟5代長谷川法眼等伯70歳(法名日妙)
- 1610(慶長15) 徳川家康に招かれ江戸へ下る
旅に病んで江戸に着いて2日死去

- * 雪舟等揚一周徳一等顔(雲谷・雪舟3代と称す)一等春一等伯
- * 国立博物館 松林図
- * 佐倉美術館 烏鷺図

御津のまけほの

初 版 2004年7月31日

第2版 2005年8月1日

発行／岡山市御津観光ボランティア・ガイド連絡会

〒709-2133 岡山市御津金川529
御津町郷土歴史資料館・交流プラザ内
TEL 0867-24-3581